# ピリジニウム塩を含む近赤外吸収色素を用いた色素増感太陽電池

Dye-Sensitized Solar Cells Based on Near-Infrared Dyes with Pyridinum Rings

広島大学大学院工学研究科物質化学システム専攻 助教 大山 陽介 e-mail: yooyama@hiroshima-u.ac.jp Department of Applied Chemistry, Graduate School of Engineering, Hiroshima University, Yousuke Ooyama

### 研究の大要

有機色素とTiO2電極から構成される色素増感太陽電池(DSSCs)は、太陽エネルギーを電 気エネルギーに変換するクリーン(二酸化炭素を発生しない)な次世代太陽光発電システム として注目されている。本研究では、新規なピリジニウム塩系近赤外吸収色素を開発し、 その置換基を様々に変換することでTiO2電極上での色素の配列・配向や分子間相互作用を 制御し、可視から近赤外領域の太陽光を有効に捕捉して、DSSCsの高効率化を図ることを 目的とする。本研究を遂行することにより、ピリジニウム塩系近赤外吸収色素の分子配 列・配向や分子間相互作用を制御して、DSSCsの高効率化を達成することのみならず、近 赤外吸収色素の熱的作用(太陽熱光線を吸収する特性)と光学的作用(光電変換特性)を利用 して、「地球環境・地球温暖化防止」を指向した新しいエネルギー材料の創出に結びつく と期待できる。

#### Abstract

Dye-sensitized solar cells (DSSCs) based on dye sensitizers adsorbed on nanocrystalline TiO<sub>2</sub> electrode have received considerable attention because of high incident solar light-to-electricity conversion efficiency and low cost of production. To improve the performances of DSSCs further, it would be very useful to develop effective new near-infrared (NIR) sensitizers for use in DSSCs, because red/NIR radiation (600-1000 nm) accounts for about 25 % of the solar energy arriving on the Earth's surface [visible radiation (350-700 nm) accounts for about 45 % of solar energy]. In the present study, as new-type NIR dye sensitizers, a novel pyridinum dye with pyridinium ring as an electron-accepting group has been designed and synthesized, and their photovoltaic performances of dye-sensitized solar cells are investigated. NIR dye sensitizers providing good absorption in the red/NIR region of the solar spectrum are regarded as one of the most promising classes of organic sensitizers for the prevention of global warming.

## 1. 研究目的

有機色素と酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)電極を用いる色 素増感太陽電池(DSSCs)は、二酸化炭素を発生 しないクリーンな太陽光発電システムであり、 環境調和型の持続的社会を構築できるものと して大きな期待が寄せられている。DSSCsの光 電変換効率の向上を図るためには、太陽光を有 効に捕捉できる有機色素の開発が緊急の課題 である。最近、可視領域(400-700nm)と近赤外 領域(700-2000nm)に光吸収特性有する近赤外 吸収色素を用いた DSSCs の開発が試みられて いる。しかしながら、最も有望とされているフ タロシアニン系やスクアリウム系近赤外吸収 色素を用いた場合でも、DSSCs の光電変換効率 は約 3~4%程度と低く、太陽光を有効に利用で きていないのが現状である。

本研究では、新規なピリジニウム系近赤外吸 収色素を開発し、その置換基を様々に変換する ことで TiO<sub>2</sub> 電極上での色素の配列・配向や分子 間相互作用を制御し、可視から近赤外領域の太 陽光を有効に捕捉して、DSSCs の高効率化を図 ることを目的とする。

#### 2. 研究経過

新規な近赤外吸収色素として、ピリジニウム 系近赤外吸収色素 OH12 を分子設計・合成した。 さらに、比較としてピリジン系蛍光性色素 OH11 とビピリジン系蛍光性色素 OH13 を合成 した。色素 OH11、OH12 および OH13 の光物 性および電気化学的特性を評価するために、可 視吸収・蛍光スペクトル測定およびサイクリッ クボルタンメトリー(CV)測定を行った。これら 色素を用いた DSSCs を作製し、IPCE(Incident Photon to Current conversion Efficiency)測定や電 流 - 電圧(*I-V*)測定から光電変換特性を評価し た。

## 3. 研究成果

キノン系色素(1)を酢酸中、酢酸アンモニウム 存在下で4-ピリジンカルボキシルアルデヒドと 反応させることにより、構造異性体の関係にあ る二つの色素(2)と(3)を合成した。色素(2)と 4-ブロモ酪酸との反応により色素(4)へと導き、そ の後、加水分解することでピリジン系蛍光性色 素 OH11 を合成した。蛍光性色素 OH11 と 1-ヨ ードブタンと反応させることでピリジニウム 系色素 OH12 を得た。キノン系色素(1)を酢酸中、 酢酸アンモニウム存在下で 2,2'-ビピリジン -4,4'-ジカルボキシアルデヒドと反応させるこ とにより、オキサゾール環の形成とアルデヒド 基の酸化が進行し、ビピリジン系蛍光性色素 OH13 を得た(Scheme 1)。



Scheme 1. Synthesis of OH11, OH12, and OH13.

色素 OH11-OH13 の光物性を調べることを目 的として、THF 中での可視吸収および蛍光スペ クトル測定を行った。可視吸収スペクトルにお いて(Figure 1)、色素 OH11-OH13 は、350-370 nm 付近に  $\pi \rightarrow \pi^*$ に由来する吸収帯を示した。さら に、OH11 と OH13 では 410-425 nm 付近に、 OH12 では 560 nm 付近に、ジブチルアミノ基か らピリジンあるいはピリジニウム環への分子 内電荷移動特性(ICT)に由来する吸収帯が出現 し、ピリジニウム系色素 OH12 の ICT 吸収帯は、 ピリジン系色素 OH12 の ICT 吸収帯は、 ピリジン系色素 OH12 の ICT 吸収帯は、 ピリジン系色素 OH11 とビピリジン系色素 OH13 の ICT 吸収帯よりも約150 nm も長波長シ フトした。対応する蛍光スペクトルにおいて、 OH11 と OH13 の蛍光極大波長はそれぞれ 533 nm と 559 nm に出現し、蛍光量子収率(Φ)はそれ ぞれ 0.86 と 0.34 であった。一方、OH13 は蛍光 性を示さなかった(Table 1)。色素 OH11-OH13 を TiO<sub>2</sub> 薄膜に吸着させた状態での光吸収スペ クトルを Figure 2 に示す。TiO<sub>2</sub> 薄膜に吸着した OH11-OH13 の吸収極大は、それぞれ 450 nm、 588 および 445 nm に出現し、THF 中での吸収ス ペクトルと比べてそれぞれ 38 nm、22 nm およ び 20 nm ほど長波長シフトした。ピリジニウム 系色素 OH12 の吸収末端は 780 nm までおよぶ ことが分かった。



Figure 1. Absorption (–) and fluorescence (…) spectra of **OH11**, **OH12**, and **OH13** in THF.



Figure 2. Absorption spectra of **OH11**, **OH12**, and **OH13** adsorbed on  $TiO_2$  film.

色素 OH11–OH13 の電気化学的特性を調べる ために、DMF 中における CV 測定を行った(vs. Ag/Ag<sup>+</sup>)。OH11 と OH13 においては、可逆な一

電子酸化波(Epa<sup>ox</sup> = 0.40 V と 0.35 V)が観測され . たが、**OH12**は非可逆な酸化波(E<sub>pa</sub><sup>ox</sup> = 0.40 V)を 示した(Table 2)。吸収および蛍光スペクトルと CV 測定から得た酸化電位を用いて、色素の HOMOとLUMOレベルを見積もったところ(vs. NHE)、OH11 はそれぞれ 0.96V と-1.62V、OH12 はそれぞれ 0.96V と-0.82V、OH13 はそれぞれ 0.91V と-1.62V であり、OH11 と OH13 に比べ て、OH12のLUMOは正側にシフトしているこ とがわかった。OH11 と OH13 の LUMO レベル は、TiO2電極の伝導帯(CB, -0.5V vs. NHE)より も十分に負側にあり、色素から TiO2 電極への電 子注入が可能であることが示唆された。一方、 **OH12**の LUMO レベルは TiO2 電極の伝導帯レ ベルに近く、**OH11** と **OH13** に比べて電子注入 効率は低下することが予想された。

Table 1. Spectroscopic properties of **OH11**, **OH12**, and **OH13** in THF

Dye	$\lambda_{max}^{abs}/nm$	$\lambda_{max}{}^{fl}/nm$	$arPsi^{[a]}$	SS <sup>[b]</sup> /nm
	$(\varepsilon_{\text{max}}/\text{dm}^3\text{mol}^{-1}\text{cm}^{-1})$			
OH11	349 (31000)	533	0.86	121
	412 (26600)			
OH12	368 (43000)	_	-	-
	560 (12200)			
OH13	351 (36000)	559	0.34	134
	425 (23700)			

[a] The  $\Phi$  values were determined by using a calibrated integrating sphere system ( $\lambda_{ex} = 325$  nm). [b] Stokes shift value.

Table 2. Electrochemical properties of **OH11**, **OH12**, and **OH13** and their energy levels of HOMO and LUMO

		0,		
Dye	$E_{\rm pa}/{\rm V}^{[{\rm a}]}$	$E_{\rm pc}/{\rm V}^{\rm [b]}$	HOMO/V <sup>[c]</sup>	LUMO/V <sup>[c]</sup>
OH11	0.40	0.35	0.96	-1.62
OH12	0.40	-	0.96	-0.51
OH13	0.35	0.25	0.91	-1.62

[a], [b]  $E_{pa}$  and  $E_{pc}$  are the anodic and cathodic peak potentials *vs*. Ag/Ag<sup>+</sup> in acetonitrile. [c] *vs*. a normal hydrogen electrode (NHE).

色素 OH11、OH12 および OH13 を用いた DSSCs を作製し、入射単色光(λ)当たりの光電変 換効率(Incident Photon to Current conversion Efficiency: IPCE)を行った(Figure 3)。OH11 の IPCE<sub>max</sub> は 38% (@500 nm)、OH12 では 6%

(@600nm)、OH13 では 4% (@470nm)であり、ピ リジニウム系色素 OH12 の IPCEmax は、ピリジ ン系色素 OH11 とビピリジン系色素 OH13 の IPCE<sub>max</sub> よりも長波長側にある。AM 1.5、照射 光強度 100 mW cm<sup>-2</sup> での電流-電圧(I-V)測定か ら(Figure 4)、OH11、OH12 および OH13 の短絡 電流密度(J<sub>SC</sub>)はそれぞれ 4.33 mA cm<sup>-2</sup>、1.74 mA  $cm^{-2}$ 、0.62 mA cm<sup>-2</sup>であり、光電変換効率( $\eta$ )は それぞれ 1.33%、0.51%、0.15%であった。一方、 **OH11、OH12** および **OH13** の開放電圧(V<sub>oc</sub>)はそ れぞれ、522 mV、444 mV、392 mV であった(Table 3)。 ピリジニウム系色素 OH12 の低い光電変換 効率の理由として、OH12 の LUMO レベルが TiO2 電極の伝導帯レベルに近く、色素からTiO2 電極への電子注入効率が低いためと考えられ る。



Figure 3. IPCE spectra of DSSCs based on OH11, OH12, and OH13.



Figure 4. Photocurrent-voltage curves of DSSCs based on OH11, OH12, and OH13.

Table 3. Photovoltaic performances of DSSCs based on OH11, OH12, and OH13

Dye	$J_{\rm sc}$ /mA cm <sup>-2</sup>	$V_{\rm oc}/{ m mV}$	ff	η /%
OH11	4.33	525	0.58	1.33
OH12	1.74	444	0.66	0.51
OH13	0.62	392	0.62	0.15

## 4. 今後の課題と発展

得られた実験結果を総合的に評価し、分子設計にフィードバックして近赤外吸収色素の機能強化(置換基の最適化による太陽熱光線の吸収特性の改善と分子配列・配向性の精密な制御)を図り、DSSCsの光電変換率6%を目標とする。さらに、近赤外吸収色素の良好な熱的作用(太陽熱光線を吸収する特性)と光電気化学的作用(光電変換特性)を利用した新しい「地球環境・地球温暖化防止」材料の創出を目指したい。

#### 5. 発表論文リスト

<u>Y. Ooyama</u>, S. Inoue, R. Asada, G. Ito, K. Kushimoto, K. Komaguchi, I. Imae and Y. Harima; Dye-Sensitized Solar Cells Based on a Novel Fluorescent Dye with Pyridine Ring and a Pyridinium Dye with the Pyridinium Ring Forming Strong Interaction with Nanocrystalline TiO<sub>2</sub> Films; *Eur. J. Org. Chem.*, **2010**, *1*, 92-100.